

# 創作作品における坂道の研究を通して 千代田区の坂を舞台にした短編映画制作

## 目的

千代田区の坂をテーマとした短編映画を学生と共同で制作した。

千代田区は名前のついた坂の数が東京23区のなかでは5番目に多い。こうした坂をモチーフにした短編映画制作を通して、千代田区の環境や風景を、坂という視点から捉え直してみるのが目的である。

映画や小説などの創作作品で坂を取り上げている作品は多い。「坂道のアポロン」「柘榴坂の仇討」「たまらん坂」「コクリコ坂」や、司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」などの作品は題名にも坂を使用している。また内容としても、坂は印象的な場面設定に使われるだけでなく、シンボリズムとして、登場人物の高揚や緊張を表現し、また物語の進行とともにキャラクターの成長や変化なども表すこともある。こうした創作における坂というものを研究し、千代田区を舞台にした短編映画制作に反映させていく。千代田区の風景や環境を短編映画によって捉え直すことで、新たな風景としての千代田区を描くことが目的である。

## 研究内容・結果

2日間の研究ワークショップをゼミ学生と共に開催した。

創作における坂道の研究として映画「天気の子」を題材にして、ゼミ生と共にグループワークを行う。

1日目：映画「天気の子」の表現のなかで、坂道がどのような意図をもって描写されているかを4グループに分かれて研究・討論したのち発表を行った。

2日目：1日目に行った研究をもとに、坂道の創作的効果を用いた映像演出を入れ込んだ脚本を執筆した。午後は1分間の短編映画を4本撮影し、発表を行った。

研究で得た考察をもとに、短編映画の脚本を執筆。

その内容や演出意図に合う坂を探すためにロケハンをゼミ生と共にする。

撮影に必要な坂は約15となった。

5日間の撮影を経て、作品は完成した。



## 考察・まとめ

今回、坂道をテーマにした短編映像作品を制作するという研究を通して、映像演出とはなにか、という問題を深められた。同じシーンを撮影するにしても、そこが普通の道か、坂道なのかで、できたシーンの効果というのが変わってくる。ストーリーとしては、同じ内容かもしれないが、そこにある登場人物の感情や、見ている観客に無意識に与える効果という意味では、坂道という機能はとても効果的なものだとわかった。また、映像のなかにある景観として、坂道はとても魅力的なものであった。画面の手前と奥との差が大きいので、映像に奥行きがでやすい効果があった。

多くの人に、この作品を見てもらったあと、千代田区を歩いてもらいたいと願っている。そして坂の多い風景を楽しんでもらいたい。